EPOCHMAKER
豊島区立男女平等推進センター（エポック10）情報誌
えぽっく・めいかー
2010.3 NO.37

メディアのしかけを見抜く！
～メディアリテラシーを学ぶ～

画：宮崎俊枝

Epoch 10
限りない飛躍、可能性

◆巻頭インタビュー：「メディアのしかけを見抜く!」諸橋 泰樹さん P2-4
◆区民企画運営講座報告・メディアリテラシー関連書籍紹介 P5
◆平成21年度エポック10講座に参加して P6-7
◆エポック10情報（22年度 講座予定／エポック10相談室のご案内） P8

メディアのしかけを見抜く！

テレビ・新聞をはじめ、雑誌・ラジオ・広告CM・インターネット等など…私たちはあらゆる場面でメディアに接して生活しています。携帯電話などの著しい普及により、メディアは24時間、世界中の様々な情報を、老若男女関わらずどこへでも持ち歩けるようになりました。欲しい情報がすぐ手に入る時代になったのです。半面、多数な意見サイトや偏ったニュース情報など、情報の質がとても気になります。受け取った情報は「ありのままの現実」としてとらえがちですが、必ず、メディアの作り手（考えのあるメディアの発信側）がいます。きちんと情報を読み解き、賢く利用できる力は受け手である私たちの大切な生きる力です。今号では、メディア・リテラシー（情報を読み解く力）をテーマとして取り上げ、冒頭インタビューとして、フェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科教授の諸橋泰樹さんにお話を伺いました。

Q1. 最近メディアで「草食系男子・肉食系女子」などの表現が多く聞かれますが、聞く人に与える影響はどんなことが考えられますか？

A 「草食系男子・肉食系女子」という言葉と概念自体はおもしろいとは思います。ですがこれは一種のマーケティング的な命名ですから、男性や女性がみんなそうなったわけではありません。メディアは社会の特化した部分を取り上げて、トレンドにしてしまうことがあります。学生が卒論で「草食系男子」について調べようとしましたが、実際には量的にとらえられませんでした。命名されることで言葉が独り歩きし、あたかも存在するような感じになってしまう怖さがあります。メディアが言うことでみんながそうだと思ってしまうのは、まさにメディア・リテラシーの問題です。

相変わらず学生の中にDV（ドメスティックバイオレンス）はありますし、今の若いカップルを見ていても、「小さな亭主と追随する小さな女房の関係」を目にします。どこが草食系だ、と思うことがありますね。

Q2. インターネットの世界も含めて、マスメディアの情報を受け取る際に気をつけることは何ですか？

A メディアが取り上げているものは絶対ではないということです。メディアは全体像を伝えられません。特化したものだけを取り上げる、あるいは特化するように作っていくのがメディアの宿命なのだということにまず気をつけたいところです。私たち自身、見出し1行、ポスター1枚、15秒のCM、あるいは30分の番組を見ただけで知ったつもりでいます。メディアは全体像を提示するのに限界がありますし、私たちも時間や思考を節約しているということを、お互いに知った上で、作ったり見たりするしかない、ということを認識しなくてはなりません。また、先の「草食系／肉食系」もそうですが、メディアがいったん報道すると大多数の人がみんなそうだというような気持ちになり、自分の意見は違うという人は意思表明ができなくなります。沈黙すると、メディアや一部の人の声は益々大きく聞こえてきます。これを「沈黙のスパイラル」といいます。メディアは沈黙発生装置、一部の意見が大多数の意見だと思わせる装置でもあるということにも気をつけたいです。

もう一つ、メディアが取り上げるタイミングのよさ、あるいはタイミングの悪さについても気をつけてみてください。偶然かもしれませんが、もしかしたら色々な立場の人の意図があって「できごと」が仕掛けられ報道されているのかもしれません。

インターネットの場合は、匿名性が高いコミュニケーション空間ということで、不用意な発言を抑制する力が弱まりますから、人のことを罵倒する場となりやすく、ただのつぶやき、不確かな情報、確信犯によるデマゴギーなどが溢れる場となりがちです。9割は屑の情報と言ってもいいのではないでしょうか。

Q3. メディアの仕掛けを見抜くにはどうしたらいいでしょう？

A メディアの仕組み、つまり作られ方から報道のされ方、制度、流通、私たちの受け取り方などのプロセスを知ることが第一です。また、一つの出来事には、表と裏（――顕在的な機能と潜在的な機能――）があり、意図した結果と意図せざる結果、マイナスの側面とプラスの側面があります。それが故意であれ偶然であれ、「これで得する人は誰か」、「損する人は誰か」、「隠れてしまったことは何か」と常に考える、そのような社会の仕組みを読む力（ソーシャル・リテラシー）があるとよいと思います。

Q4. ではメディアを見抜く能力というのは、「社会を見抜く能力」ということでしょうか？

A メディアは社会の縮図ですから、そう言っていいでしょう。でも「見抜き」だけではなくて、社会に対する「働きかけ」も重要なのです。選挙で1票を投じることだけでなく、「変だ、おかしい」と意思表示をすることです。社会は、権力を用いて私たちにポリティカル（政治的）なものを行使していますが、私たちもポリティカルな存在として社会に民衆権力を行使していく、あるいは要求していくことは重要だと思います。メディア・リテラシーも同様に、テレビや新聞や雑誌、ネットなどを批判的に見るだけではまだ不十分で、テレビ局に伝えたり新聞社に声を寄せたりすることに意味があります。メディアも私たちによる相互の働きかけの中にあるのです。

Q5. 人々が参画できるという点でインターネットを使用することが大切なのでしょうか？

A インターネットは人々の社会参画という意味では、いいメディアになり得るだろうと思います。居ながらにして海外の人とコミュニケートでき、以前は役所の情報を手に入れるのに霞が関まで行って資料をもらっていたのに、今は各省庁のホームページからデータがすぐ手に入るのも有難いことです。

しかし、その安易さが危険な面はたくさんあります。一番いけないのは「調べる」能力が衰えたことです。不確かな情報、嘘の情報発信、

感情バトルの場として機能していることなども問題です。使いこなす能力と倫理を高める必要があるでしょう。

Q6. 子どもたちのメディア・リテラシー能力を磨くにはどうしたらいいでしょうか？

A テレビや新聞、あるいはポスターなどを見て、「こういうのは、どうかな？」とか、「これをどう感じる？　私は不愉快に思う」など、コミュニケーションをとることが大事です。子どもは嫌がりますけどね（笑）。何気ない日常生活の中で、気づくチャンスを一緒に作ることで能力は磨かれます。様々な見方がある、クリティカル（批評的）に見る、ということを教えるのはおとなの使命です。

携帯電話とインターネットですが、生身の対人コミュニケーションも上手く取れない子ども、図書館の使い方、辞書の調べ方や新聞の読み方も知らない子どもが、上手く使いこなせる訳がありません。学生やおとなでさえ振り回されているのに、です。しかし、もはや成立してしまったケータイ・インターネット社会を生きるしかないのです。子どもから電子メディアを取り上げるのではなく、子どもたちが無事に使いこなせる能力をつけてあげるしかないと思います。携帯電話のプロフ（ネット上で自己紹介のできるサイト）は誘拐に使われる危険性がある、詐欺にあう、インターネット情報は安易に引用してはいけない、匿名性が高く無責任といった現在の電子メディアのマイナスの特性を、子どもに教えることが大切です。

電子メディアは親の知らないところで、思いもよらない使われ方をしています。まず眼に見えるところでの、基本的な対人コミュニケーションについての力をつけてあげることが大事なのだと思います。

Q7. 最近は送り手側の意識もジェンダーに配慮するなど、変わってきているのでしょうか？

A 徐々に変わってきているとは思います。それは、女性のオーディエンス（視聴者や読者）に、そっぽをむかれたくないという理由からで、必ずしも女男平等の考え方が浸透したからではないかもしれませんが。

ひとつのターニングポイントとなったのが、1980年代半ばからのメディア不信です。写真週刊誌やワイドショーなど、人のプライバシーにまで踏み込むような報道が増え、一般の人までが1日中メディアに追いかけられ社会的に葬られてしまう状況に、さすがにオーディエンスからのメディア批判が増えて、人権侵害という観点からメディアの倫理が問われることになりました。

同じ頃、1975年の国際婦人年をきっかけにできた「行動を起こす女たちの会」が、メディアに対し女性の人権侵害を指摘しました。モノを売るのに訴求内容と関係なく女性が水着姿や裸で出てくるのは、性の商品化であり、女性の人権を侵害しているのではないか、それを見させられる女性にとっても不愉快で、人権を侵害しているのではないか、といったような批判が出、運動が繰り広げられました。メディアもこのままでは信頼をなくすということに気付き、倫理綱領を見直し、女性の人権を侵害しない内容のガイドラインを作るなどしはじめました。

1990年代後半からは当時の総理府も、男女共同参画施策の中で、公的広報のジェンダー表現に関するガイドラインを検討しました。ぼくも関わりましたが、国や県や市町村で、公的広報における性別役割表現や性差別表現、女性と男性とで扱いが異なる二重規準表現をやめていこうというガイドラインが作られ、以降、それらが多少メディアにも影響を与えていますし、オーディエンスもセンシティブ（敏感）になってきていると思います。その成果の一つは男女雇用機会均等法の改正の中で「スチューワーデス」や「ボーイ」という言葉を禁止し、「保育士」「保健師」「看護士」といったような性別中立的なものに変えたことです。

しかし、メディアは表現ガイドラインを持っていると言っても常に監視をしていかないと、作り手の方も忘れてしまいますし、世代交代しますし、現場の隅々にまでは行き渡りませんし、研修や教育などもほとんどありませんから、資本の論理で視聴率や部数が取れるなら「まあ、いいかな」となっている実情があります。

Q8. 作り手側に女性が少ないことが関係していますか？

A そうですね。意思決定する上層部にも女性が少ないです。数の平等が結果の平等を生むとは必ずしも思いませんが、たとえ形式的な数の平等が進むだけでも、ずいぶん違ってくるでしょう。

また、メディアへの批判はたくさん来ますが「あれはよかった、またやってほしい」という意見はほとんど来ません。作り手側は何が良かったのかオーディエンスの反応を知りたいのです。ですから、「悪いものは批判してつぶしていく」という市民的責務と同時に、「いいものは支持して育てる」ということも私たちの大事なリテラシー行動です。様々な立場の人々がメディア・リテラシーを身につけ、発信していくことが大切です。

私たち視聴者は、メディアの伝えている内容はありのままの現実ではないことに気付かなければなりませんね。受け身ではなく意識的になり、良いと思うものは支持していき、上手にメディアを活用していくことが大切なのですね。本日は貴重なお話をありがとうございました。

諸橋（もろはし）　泰樹（たいき） さん　プロフィール

1956年生まれ。フェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科教授。
専攻：マス・コミュニケーション学、女性学、社会学。自治体で男女共同参画関連の委員や会長を務めるほか、サブカルチャー、ポストコロニアリズム、平和、ジャーナリズムなどについての発言も多い。
・日本新聞学会（現　日本マス・コミュニケーション学会）会員・日本社会心理学会会員
・日本女性学会会員・日本出版学会会員

『メディアのしかけを見抜く！』～メディア・リテラシーを学ぶ～

講 師　**諸橋　泰樹** さん

満員御礼

エポック10 区民企画運営講座

日時：2010年2月26日（金）
午後2時～4時

この講座は、エポック10エンパワーメント講座2009（4・5月に実施）を受講した有志と、エポック10運営委員を中心とした区民企画・編集委員が企画した講座です。講座のほかに情報誌「えぽっく・めいかー」の編集作業にも取り組んでいます。

エポック10区民企画運営講座『メディアのしかけを見抜く！』に参加をしました。

まず驚いたのは、会場ぎっしりの人…。性別、年齢層様々な方がこんなにたくさん集まる講座ってどんな講座だろうとワクワクしました。感動したのは、講師の話が簡潔でわかりやすかったこと。映像を見ながら、意見を聞きながら、書きながら…のまさに五感を使った“体感”講座。「作られたメディアによって、私達の意識が作られる（受身）」こと、そのメディアは「現実を切り取り加工している媒体である」こと、メディア情報を「自分の考えで主体的に読み取る」ことが大事であることを学びました。

性別による固定的役割（ジェンダー）がたった15秒のCMからですら（無意識に！）我が身に、我が子に、我が社会に“曲がった常識”を刷り込んでいる…ドキッとしました。ただ受け取ればよいというものではない!!まさに『目から鱗』の講座でした。「知ることは楽しい、知らないことは怖い…」ですね。　（M）

メディアリテラシー関連書籍の紹介

『メディアリテラシーとジェンダー―構成された情報とつくられる性のイメージ』

諸橋泰樹著／現代書館　二〇〇九

新聞、雑誌、テレビ等のメディアにおけるジェンダー問題やフェミニズム問題をとりあげている。マスメディアの性教育バッシング番組により、ジェンダーフリー批判・性教育批判がいかに語られ、構成されているのか、また、女性雑誌に見える「格差問題」と「身体観」などの分析を通して理解が深まる内容となっている。

『表現とメディア―新編 日本のフェミニズム7』

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編著／岩波書店　二〇〇九

マスメディアによって描かれている女性像、ステレオタイプ等、女性をめぐる様々な問題と課題を、フェミニズムの視点から説明している本である。

文学や少女マンガ、歌謡曲、雑誌に見られる女性像の歴史的変遷や新聞やテレビなどのメディアにおける性差別表現を具体的に知ることができる。

『世界を信じるためのメソッド―ぼくらの時代のメディア・リテラシー』

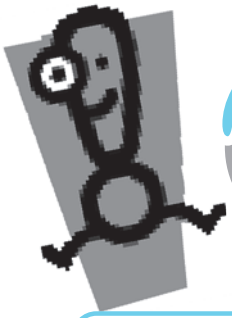
森達也著／理論社　二〇〇六

ドキュメンタリー作家である著者が松本サリン事件、湾岸戦争などの過去の事件報道を取り上げ、誰がどのようにメディアを操作しているのか、私たちはどのような視点で見るべきかを考えさせてくれる。中・高校生の若い読者に向けてわかりやすく書かれているので、親子で一緒に学べる一冊。

『メディア・リテラシー―世界の現場から―（岩波新書）』

菅谷明子著／岩波書店　二〇〇〇

イギリス、アメリカ、カナダにおける学校現場のメディア教育を中心に、著者が5年間取材した実際の体験をまとめて論述している。北米やヨーロッパでの情報に関する教育について、ルポ形式で描写しているところは、読者がマスメディアとの関わり方を考えるきっかけになる。海外におけるメディア教育の状況を知りたい人にもおすすめ。



2009 エポック10の

エポック エンパワーメント講座2009

日時：2009年4月～5月（火・木曜日）午後2時～4時（全6回）
講師：久保 まゆみさん（親業を学ぶ会代表）
美野 直子さん（臨床心理士）
斎藤 富由起さん（千里金蘭大学准教授）

講座のテーマは、コミュニケーションスキルを磨き、人間関係を改善して、力をつけること。「わたしらしい生き方をするために」（第2回）、「自分の気持ちを表現するアサーティブスキルを学ぶ」（第5回）など。

講座では、グループワークやロールプレイを行い、相手を思いやるコミュニケーションのしかたを学ぶことができ、ビジネスや家族間の人間関係の構築に大変役に立ちました。

とくにアサーション（さわやか自己表現）という手法を知り、参考になりました。　（文責：藤田　由美子）

講師：斎藤 富由起さん

エポック10フェスタ「当事者が語る性の多様性」

日時：2009年6月19日（金）午後6時～8時
講師：石川 大我さん（特定非営利活動（NPO）法人ピア・フレンズ代表理事）

性的マイノリティ（LGBT）の現状を知り、理解を深めるためにエポック10運営委員会が企画した講座です。もって生まれた体の性と心の性がくい違ったり、同性を恋愛の対象とする人々がいます。性自認や性的指向は人によってさまざまですが、まだ世の中に認知されているとはいえません。講師の石川さんは、多様な性の形があることを語ってくれました。

全ての人は認められて生きる権利があること、多数派だけが正しいのではないこと、常識にとらわれないことなどを気づかされた貴重な講座でした。　（文責：吉永 映子）

エポック10シネマ ～映画に学ぶ人々の生き方～

日時：毎月第3金曜日（一部、水・土曜日）
午前10時～12時、午後2時～4時

初めてエポックシネマを利用させていただいたのは、たしか子どもが10ヶ月の頃。妊娠してから約1年半ぶりに、少し大きなスクリーンで見る映画、まして子どもは保育士さんにお任せだから安心。手ぶら（?）で映画が見られるなんて、ちょっと感動でした。それ以来、エポックシネマにはまっています。

子育て中は、なかなか映画館に行く事が出来ないけれど、保育付で映画を見る事が出来、男女共同参画も学べるなんて！とってもありがたい企画です。　（文責：遠山 都）

講座に参加して…

エポック10ゼミ「大人の総合学習～私らしく生きるためのジェンダー学入門～」

日時：2009年9月～2010年1月第4土曜日　午後2時～4時
講師：岸澤 初美さん（立教大学兼任講師）

自らが持つ疑問や問題意識をジェンダーの視点から考察するゼミ形式の連続講座です。各自が1冊の本を選択し、精読、レジュメにまとめて発表、参加者と意見交換を行います。

「私の1冊」に巡り合うまでの苦労、（何冊の本と出合い、そして別れたことか）そしてその1冊を精読し、ポイントを掴んで人にわかりやすく伝えなければ、という焦りといった多少の困難故に、学びの喜びもたっぷりと感じられます。また、他の参加者の選択したテキストを学ぶことによっても、自分の中の問題意識が深められるのでした。岸澤先生の温かくも厳しいご指導のおかげで、もっと勉強したいという意欲が強く湧いてきました。頑張った分だけ、自分の力が伸びることが実感できる講座でした。（文責：福元　保子）

エポック10登録団体との共催事業　パパと遊ぼう！

日時：2009年9月27日(日)午前10時～12時
講師：鮫島 一彦さん（NPO法人ファザーリング・ジャパン会員）と仲間たち
（共催団体：豊島区学童保育連絡協議会）

「パパと子どもで参加できる」のが魅力で、パパが申込みましたが、結局本人は当日急用で、母の私と子どもたちと、我が家に来ていたホームステイのベトナム人のお父さんと一緒に参加しました。折り紙ごまや割り箸でっぽう、ストロー笛の工作や、あやとり・お手玉などいろいろなコーナーがあり、好みのコーナーをまわって楽しみました。我が家の子どもたちは、言葉の通じないベトナム人のお父さんに手伝ってもらって作った、たくさんのおもちゃに大喜びでした。「『いいパパ』ではなく『笑っているパパ』を目指して下さい」というメッセージが心に残りました。　（文責：高木　佳代）

これからが面白い！男の生き方講座 ～包丁さばきと季節の食材～

日時：2009年11月21日(土)午前9時30分～12時
講師：女子栄養大学学生（協力 豊島えくぼの会）

料理はお湯を沸かすことと、インスタントラーメンをつくることぐらい。料理教室に参加しないかと誘われ渋々参加。

献立はぶりの照焼きと青唐辛子丼、生まれて初めての魚料理、教えられるままに始めると意外と面白い。この楽しさや面白さは今までに経験した事が有る。趣味の模型や工作をしている時と同じ楽しさだ。工作などと料理作りと共通する面白さがあるとは、この60数年知らなかった。新しい発見をした思いでした。　（文責：青木 輝彦）

エポック10情報

information

エポック10では、男女共同参画社会の実現に向け、講座、講演会などの開催、情報誌の発行、学習相談、区民や団体の交流の場や機会を提供しています。
お気軽にご利用ください。

平成22年度　講座開催予定

エポック10 アンコールシネマ上映会

4月16日（金）
上映①　午前10時～12時『最高の人生の見つけ方』
上映②　午後2時～4時30分『フラガール』
★映画の中の人々の生き方、考え方に触れてみませんか？

エポック10 エンパワーメント講座2010

～ステップUP！スキルUP！“わたし”力アップ塾
4月9日・23日・5月7日・14日（金・全4回）
★キャリアデザイン、メンタルヘルスなど、賢くしなやかに生きるためのスキルを学ぶ講座。

エポック10フェスタ2010

6月18日（金）・19日（土）
★男女共同参画週間（毎年6月23日～同29日。男女共同参画社会基本法の公布・施行）にちなみ、エポック10の運営委員、登録団体による様々な学び、参画企画が目白押しの2日間です。

共催事業講座

★登録団体、他の自治体とエポック10の共催講座です。

ワーク・ライフ・バランス　フォーラム

男女共同参画都市宣言記念週間講演会

★詳細は、広報・ちらし・ホームページ等でお知らせいたします。

編集後記

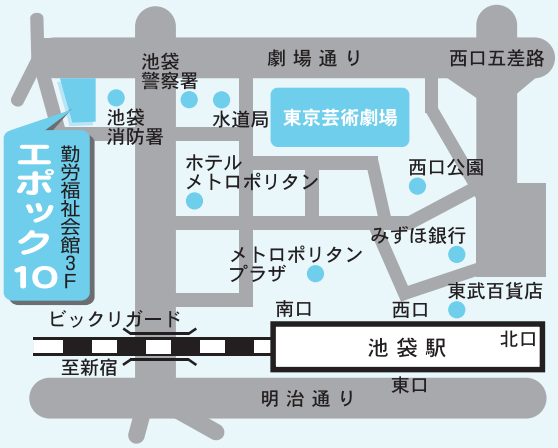
・メディアの仕掛けを見抜く能力をつけるぞ。　（翔）
・他の編集委員さんとの出会いが刺激的でした。（高）
・「あれ？」と気づける感性を磨きましょう。　（福）
・社会に対する働きかけの大切さを知りました。（由）
・先生のインタビューは大変深かったです　（吉）
・今回の編集を通して「メディア・リテラシー」を改めて考えてみるいい機会になりました。　（L.H）

迷っている人、悩んでいる人、お話ししてみませんか？

エポック10相談室
TEL：03 (3980) 7830

●一般相談は、月～土曜日の午前９時～午後５時です。
●専門相談は、女性の「弁護士・医師・臨床心理士・カウンセラー」が相談に応じます。
●専門相談は、予約制です。　※どの相談も無料です。

相談名	曜　日	時　間
法　律	①第１金曜日	午後1時30分～4時30分
	②第３金曜日	午後6時～9時
からだ	第２金曜日	午後5時～8時
こころ	①第２水曜日	午後1時30分～4時30分
	②第４火曜日	午後6時～9時
ＤＶ	第３水曜日	午後1時～4時



豊島区立男女平等推進センター（エポック10）

〒171-0021　豊島区西池袋2-37-4
勤労福祉会館3階・4階
TEL：5952-9501　FAX：5391-1015
Eメール：A0029117@city.toshima.lg.jp

開館時間
月～土曜日：午前９時～午後９時
毎月最終月曜日の前日（日曜日）：午前９時～午後５時
※ただし、毎月最終月曜日・祝日は休館です。

〈発行〉豊島区
〈印刷〉有限会社　オール印刷工業

この印刷物は再生紙を使用しています

ホームページ：http://www.city.toshima.lg.jp/jinken/danjokyodo/index.html
（豊島区公式ホームページの下部、生活ガイド〈男女共同参画〉から入れます。）